

日本人の心視て歩き―隠れキリシタンの里を訪ねて―

(概 要)

天文十八年（1549年）八月十五日、一隻の南蛮船が鹿児島県の山川港にひっそりと入港した。フランシスコ・ザビエルが乗ったポルトガル船である。

日本の切支丹信仰の歴史は彼が山川港に上陸したこの瞬間から始まります。彼はスペインの生まれでカトリックの一派イエズス会の一員として、ポルトガル王ジョアン三世の要請でインド方面の伝道に従事し、後にたまたまラッカで日本人ヤジロー（アンジロー）と出会い、日本伝道に踏み切ることとなりました。



彼は九州の鹿児島から長崎の平戸、そして中国地方きっての名門大名の大内氏の本拠地である山口に足を伸ばします。しかし布教は思いに任せず嘲笑や罵声ばかりで一向に成果は上がりず失意の内に山口に別れを告げる事になります。

天文二十年（1551年）再びサビエルはインド副王の使節として「日本の王」に献上すべき贈物を携えて山口を訪れました。大内義隆は非常に喜びパードレ保護の高札を立て、無住の寺を住院に提供するなど、サビエル一行を丁重に遇します。

ザビエルが我が国に渡来した究極の目的は「日本の王」すなわち天皇に拝謁し全国的な規模での布教の自由を許されることにあったのです。

彼は天文二十年一月半ば、厳冬の雪道を踏破して、夢にまでみた京都への第一歩を印しました。

しかしザビエルの眼前に開かれた京都の現実はあまりにも無残なものであり、時あたかも戦国乱世の真只中で、天皇はもとより足利将軍まで零落してどこを探しても「日本の王」たるべき存在は見当たりませんでした。

ザビエルは京を見限り失意の中、淀川を下って帰路の途に就きました。

彼の悲願であった京都開教が現実になったのは、彼が日本を去って八年目の永禄二年（1559年）の事です。

彼の帰国後、代わってきたガスパル・ビレラ及びルイス・フロイス一行が京都を中心に足利義輝に謁見し、布教を公認されたことにより永らく途絶えていた布教活動も本格化する事となります。

しかし永禄八年（1565年）に将軍義輝が松永久秀に殺害されるという事件が起こり一時期京都での布教は途絶えてしまいました。

しかしこの様な時代背景があった中でも一つの光明がもたらされるのです。

それは比叡山延暦寺を焼き討ちし石山本願寺を壊滅させた織田信長の登場です。

信長は徹底した無神論的合理主義者としてその名が高いにも拘わらずキリスト教に対してのみ極めて好意的でした。

それが証拠に①京都の姥柳町に南蛮寺を建立させて布教の許可

②近江安土城下に住院聖堂及びセミナリヨを新設

させたことなどが挙げられます。

その意味では信長はイエズス会の宣教師が我が国で巡り合った最大のキリスト教保護者でした。

この頃、日本国内における諸大名は、領土拡大の必要とその安全とに迫られ、富国強兵の政策をとっていました。特に中国地方の大内義隆、九州地方の大友宗麟・有馬晴信・大村純忠らはポルトガル・イスパニア両国と盛んに交易を展開、その見返りに自分の領国でキリスト教布教の自由を承認していました。

織田信長は旧仏教勢力への対抗政策上、キリスト教を利用し、自らの勢力拡大につなげようとしたのです。信長健在の間に切支丹振興は飛躍的な発展を遂げました。

【キリシタン大名 高山右近の登場】

織田信長のキリスト教への手厚い保護の元、各地にキリシタン大名が生まれてきます。

その一人にキリシタン大名として有名な高槻城城主高山右近（天正元年から天正十三年）挙げられます。右近は日本のキリスト教の歴史における最初のキリスト教徒の中で、最も立派で熱烈な信者だと伝えられた大名でした。

永禄六年（1563年）11歳の時にロレンソから洗礼を受けジュストと命名されます。

最盛期、右近が領主であった高槻は領民25,000人のうち18,000人（全村民の72%）がキリシタン信者となって領内には20カ所の教会堂がたてられたという事です。



【高山右近に拘わる主要年表】

年号	西暦	主要な出来事
天文二一年	1552	高山右近が生まれる。
永禄七年	1564	右近が一族とともに沢で受洗（洗礼名ジュスト）。
天正元年	1573	信長が足利義昭を追放 右近が高槻城主となる。
天正四年	1576	信長が安土城の築城を開始。
天正八年	1580	信長が安土城下の屋敷を右近に与え、セミナリヨ（神学校）が建つ。
天正九年	1581	右近、高槻にヴァリニャーノを迎え復活祭を開く。
天正十年	1582	本能寺の変 右近、秀吉の配下で山崎合戦に参加。
天正十一年	1583	秀吉が大阪城を築城。
天正十三年	1585	右近、秀吉によって播磨明石に移される。
天正十五年	1587	秀吉の九州出兵に参加するもバテレン追放令で改易。
天正十六年	1588	前田利家に招かれ右近金沢に移る。
慶長十九年	1614	キリシタン禁教令で右近国外追放（フィリピン マニラ）。
慶長二十年	1615	右近が死去 大坂夏の陣で豊臣家が滅ぶ。

【信長亡き後のキリシタンの試練】

本能寺の変で倒れた信長の後、秀吉が天下統一をなしとけ、右近もその側近となり、厚い信頼を受けていましたが、秀吉の九州遠征の後、秀吉の権力が絶頂に達したとき、突如天正十五年（1587年）最初のキリシタン禁制が発令、右近に信仰を捨てるように要求。

だが右近はこれを拒否しキリスト教を捨て去ることはしませんでした。

1614年の徳川家康による第二回目のキリシタン禁制がでて、右近は国外（マニラ）に追放となります。その後の高槻を中心とするキリシタンは急速にその姿を消していきます。

そして万国博覧会場と大阪北部茨木市の北部（バスで約40分）の千堤寺という村落で大正時代までひっそりと「隠れキリシタン」として信仰の灯をともしてきました。

千堤寺という地名は、付近に寺がないのにこの名があることからおそらく隠れキリシタンが名付けたらしいということです。（「千」は一説には十字架を表すものではないかと言われています）
又、この地は当時キリシタン大名の高山右近の領地だったことにも影響しているのかもしれませんが。

【茨木の隠れキリシタンが発見されたいきさつ】

大阪・茨木の隠れキリシタンの存在とその関係遺物が発見されたのは大正9年（1920年）の事です。
寺山という所で十字と洗礼名「マリア」が刻まれた「キリシタン墓碑」が当時小学校教員であった藤波大超（ふじなみだいちょう）氏によって発見されました。

その発見を後押したのはキリシタン遺物所有者の東藤次郎（あずまとうじろう）氏でした。
役人による踏み絵等によるキリシタン弾圧のあった我が国で、発覚を恐れながらも、恐怖との闘いの中で信仰生活を送ってきたのかもしれませんが。

当時隠れキリシタン信者の東イマさんに先祖代々に伝わる遺物を拝ましてくるようにと藤波氏が頼んだところ、イマさんはなかなか承諾されませんでした。

長男の東藤次郎氏の説得により、漸く1920年9月26日に「あけずのひつぎ」が持ち出されてきました。中には約400年前の貴重な壁画や祭具類がぎっしりと詰めてあったということです。

この「あけずのひつぎ」は東家の元屋のかまどの上の屋根裏に3個釣り下げてあったが火災の際にイマさんが持ち出したのを、近所の人達が知らずに3個の内の2つを灰と一緒に捨ててしまい1個を残すのみとなっています。

【千堤寺隠れキリシタンの生活】

キリシタン信者のひとりである中谷糸さんから語った生活様式は、数百年の迫害の歴史の中で少しずつ変わってきているが、毎年燕がやってくる頃、必ず48日間の行にはいり、食事を二食にして毎日風呂に入って身を清め「お縄にかかる」といって苦行鞭で左肩を何回も叩きながらお祈りをされていたと言います。

又子供が生まれると仏様（イエズスとマリア）に水を供え中指に又子供が生まれると仏様（イエズスとマリア）に水を供え中指に紙をまいて筒形にして供えた水に浸して子供の額に擦しました。

又何代にも渡って引き継がれた祈祷文（オラショ）を口伝えで覚えておられ、人が死ぬとお祈りを58回唱えられたという事です。

隠れキリシタンが唱えた祈祷文（オラショ）

「がらさみちみち、たんもにまるや様、御礼なし奉る。
おんなるす様御身と共に女人の中に於てましましてご果報
よみしきなり、またおんたんねんの尊き御身にてまします。
でうす様の御母様たまりを様、いまでもわれらが最後に、われ
悪人のためにでうす様を頼み給へ、あんみんじすまりを様」



めでたし聖寵満ち満てるマリア、主おんみとともにまします。
おんみは女のうちにて祝せられ、ご胎内の御子イエズスも祝せられたもう。
天主の御母聖マリア、罪びとなるわれらのために、
今も臨終のときもいのりたまえ。 アーメン

案内人 島谷幸雄

キリシタンの里	邦光史郎著（保育社）
キリシタン遺跡と巡礼の旅	マップ・ガイドブック
茨木のキリシタン遺物	茨木教育委員会

